

本を読んでみよう！

「毒草を食べてみた」
植松 黎
(うえまつ れい)
文春新書



私が小さい時、ままごとは殆ど植物がご飯や皿がわりでした。大好きな遊びだったので、ほぼ毎日やっていた記憶があります。また家族でよく山登りにも行きましたが、その時も色々な植物を摘んだり拾ったりしていました。大人になって、その身近な植物の中にも毒が含まれているものがあると知り、もっと知りたいと調べるようになりました。驚きなのは、余り植物に詳しくない人でもわかるような、本当に身近な植物にも毒性のものがある事です。

本書はそういった身近な植物から、一般的なケシやコカまでを著者が試食してみた話をはじめとして、それらの毒が持つ伝説や、毒が宗教的要素を持っていた話、ある少数民族の中だけで知られていた自殺道具としての毒の話、植物毒を使って漁をする方法（かつては日本各地にこの魚毒漁法があった）、また漢方や現代医学の薬の材料に不可欠な毒の話など、興味深い内容がたくさん載っています。昔から人間は、植物の毒とも共存して生きていたのですね。

毎日ままごとをしていた私ですが、日によっては3度の食事が苦く感じられた事や手に湿疹のようなものができたりした事があり、小さい頃はよく手も洗わず指を口に持って行ったりしていたので、何かの弱い植物毒にかかっていたのかもしれないなあ、というのが、本著を読んだ一番の感想と考察です。

みなさんも、キョウチクトウ・スイトピー・スズラン・スイセン・ポインセチア・ツツジなどにも毒があると知ったら、読んでみたいと思いませんか？スズランなどは花を活けた花瓶の水を飲んだだけでも死に至る事があるそうです。今後の安全のためにも是非、一度読んでみては如何でしょう？

河原 駒



私とキララと白州と 内藤 光

子供の頃大好きだったおもちゃの一つに囲炉裏での火遊びがある。積み木を重ねる要領で薪をくべては、揺ら揺らとゆれる火に見とれていたり、子供の手には余るくらい大きな火をつけてはドキドキしていたりした。火の危なさを自覚しながらも、なんとなく止められない特別な魅力を感じていたのかもしれない。人が多く集まると大人たちは大抵囲炉裏を囲んで酒を飲む。もちろん子供は酒の席ではお呼びではない。下手に立ち入れば、まず間違いなく怒鳴られたり、さっさと寝るようにと追い出されたりする。囲炉裏の間から大きな笑い声を外から聞きながら、なんとなく仲間はずれにされたようなさびしい気持ちにもなってくる。なによりも囲炉裏の火を大人たちに独占されてしまったことが悔しくてしょうがなかった。

ある晩、僕はちょっとした反撃にでた。風呂上りのスッポンポンのまま囲炉裏の間に入り込み、ある若杉さんの頭の上に自分のアレを乗せ、「ちょんまげ！」と叫んだのだ。大人達を笑わせれば、その場に潜り込めるかもしれないでも思ったのかもしれない。実を言うと、当時何のつもりでそんなことをしたのかも、その後どうなったのかも覚えていない。今となっては笑い話にしかないが、当の本人にとっては、大人の特権に嫉妬心を感じながら考え出した、子供なりに必死のコミュニケーションだったに違いないと思える。笑ってもらえるか、怒鳴られるか、である。

子供は大人に対して羨望と嫉妬心を常に感じている。彼ら彼女らの楽しみをいつか自分も・・・と。教育者とその生徒という関係に留まらない、白州でのこうした大人達との微妙な交流が今では結構重要な意味を持っているように思える。大人と子供はお互いに理解できないのであり、子供にとって最初の異文化との出会いとはこうしたつながりの中から生まれてくるのだと思う。

編集後記

気象庁は、今年7月15日から24日に発生した豪雨について「平成18年7月豪雨」と命名(?)しました。

そして7月30日、中国、近畿、東海、北陸、関東甲信の各地方が梅雨明けしました。関東甲信は、平年と比べると10日、昨年と比べると12日遅い梅雨明けだったそうです。

「偏西風の蛇行などの影響で、太平洋高気圧とオホーツク海高気圧が拮抗し、梅雨前線が停滞しやすかったため」と気象庁は説明しています。

さてさて。次号は8月末に、白州での「キララ夏の学校」の模様などをお知らせする予定です。ではまた来月。 井上忠彦

<http://www.hakusyu.jp/kilala/>

info@hakusyu.jp



きらら新聞 29



「書を読み、自然に親しみ、勤労にいそしむ」

2006年
7月30日

発行 キララ新聞社
発行責任者 秋山 眞兄
山梨県北州市白州町横手 2259
白州郷牧場内
TEL:0551-35-0131・4520
FAX:0551-35-0132

身を捨てても、浮かぶ瀬はあるのか

カラオケがない時代、呑み屋で歌う場合の伴奏は「流し」のギターか、「先生」のピアノであった。「流し」も「先生」も、歌う者に合わせて実に巧みに音程やテンポを変え、リードもしてくれた。私の中学高校時代の同級生Nは、今も六本木の小さなピアノ・バーのオーナーで、ピアノの「先生」でもある。先日、実に久しぶりにNのところで歌わせてもらい、懐かしい思いをした。一緒に行き、私の歌に拍手をしてくれた同級生がいう。「秋山よ。最近の若者は、カラオケで歌っているときに拍手すると怒ることを知っているか?」「どうして怒るんだ。下手でも拍手するのは普通ではないか?」「ところがそうではない。今のカラオケは歌に合わせて点数が出る。どれだけ高い点数が出せるかが問題で、拍手などの雑音は出してくれるな、ということらしい。」「では、なぜ集団でカラオケに行くのだ!一人で行けばいいではないか。」「それは俺にも分からない。世も末だよ!」…。

話は全く変わるが、最近、時代小説ブームだといわれている。特に団塊の世代といわれる世代が顕著らしい。私は団塊の世代より少し上だが、私も「純文学」を読む量が減り、時代小説を以前に増して読むようになった。以前から藤沢周平、池波正太郎、司馬遼太郎、平岩弓枝、山本周五郎、山田風太郎、柴田錬三郎などを時々読んでいたが、ここ数年、藤沢、池波、平岩を集中的に再読しているし、最近の作家として宮部みゆきの時代物や佐伯泰英のものなどを読んでいる。私を含めて、戦後の日本の鬼っこであった団塊の世代とその前後の世代が

時代小説に夢中になっているのは何故か。その理由の一つは、若いとき(1970年前後)にそれまでの価値観や秩序に対して反抗し、破壊したことと関係しているだろう。江戸庶民や下級武士や浪人、その家族が、どのような価値観・秩序、あるいは倫理観を持って貧しい暮らしを生き抜くのか、あるいは「身を捨てる」のかに惹かれているのではないか。少なくとも私はそうだといって良い。「身を捨ててこそ、浮かぶ瀬もあれ」という言葉が、最近しきりに思い浮かぶ。若者のカラオケでの生態を知ったとき、学校の同僚や、責任の一端を担っている会社の社員の言説を聞く中で思い浮かぶ。もちろん、学校の生徒、殊に問題が起きたときの親の態度に接する中で、ことさら思い浮かぶ。身を捨てることは一切せずに、成仏(浮かぶ瀬)しようとしているのではないかと頻りに思わされる。身を捨てても、浮かぶ瀬などあろうはずがない、と思い込まされている不幸に気が付いていない。

政府・与党が進めようとしている「教育基本法」改定(悪)に私は反対である。「愛国心」であれ「郷土心」であれ、また行き過ぎた「個人主義」の是正であれ、何をその理由にするにしても、今の為政者に「身を捨ててこそ、浮かぶ瀬もあれ」という生き方は皆無である。そこで語られる愛国心・郷土心・個人主義の克服云々は、権力者の高慢で自らの権益擁護以外の何ものでもない。時代小説やフィリピンの貧しい農民たちの間に息づく「身を捨ててこそ、浮かぶ瀬もあれ」とは全く異なるおぞましいものでしかない。

秋山 眞兄

○お問い合わせはお電話かこちらにてお受けします。

アルファコープ大阪「なつのがっこう」

7月の10日過ぎから降り続いた雨は白州でも脅威的な雨量となりました。甲斐駒の手前黒戸尾根でも360mmを越し、大武川も尾白川も濁流が渦巻き、農場の畑はどこも水浸しとなりました。「おろおろ歩く寒い夏」を一時は覚悟していたのです。

7月27日から大阪のアルファコープの子供達29人が、白州で10回目の「なつのがっこう」を開催しています。西の方から夏の高気圧を運んできてくれたのでしょうか、一転、暑い夏の日差しとなっています。

大阪の子供達は31日までです。

8月3日からキララの夏の学校が始まります。

畑も動物たちも山も川も今年もいつも通り皆さんを待っています。元気で来てください。



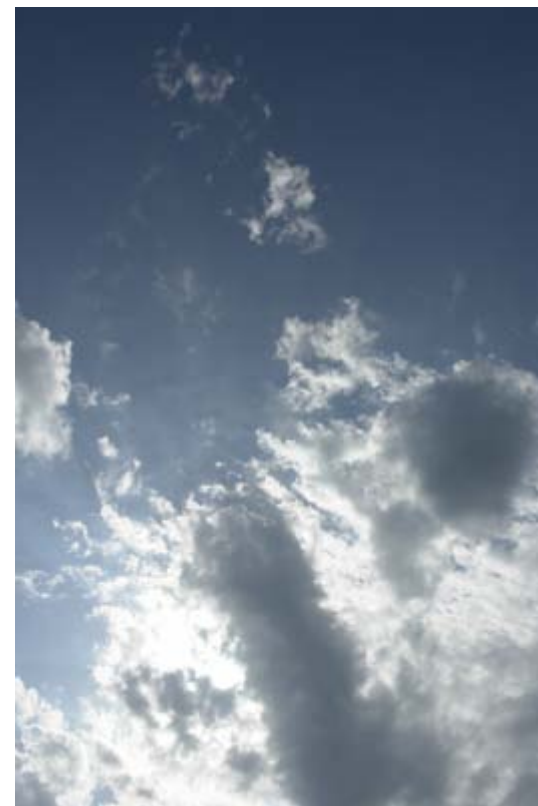
白州郷牧場の鶏をさばき、「命をいただく」。

日中韓の交流はサンチュの定植で...



写真は、左からチェさん（韓国出身）イーブンさん（中国）坂田裕美さんです。

チェさんは一年間の予定で韓国のテグから研修にやってきました。イーブンは昨年7月、若杉さんと結婚し来日し農場で働いています。サンチュの植え替えの時期となり、収穫し終えたサンチュの片付け、種まき、定植を日・中・韓の代表的（？）な女性3人でやっています。



大雨の状況

2006年7月 白州郷牧場